

# 生徒と共に取り組んだ 「比企の城館伝説」の聞き取り調査

県立小川高校 大澤 謙司

## はじめに

小川高校の社会研究部は、以前は地域史を扱う郷土部だった。熱心な顧問と生徒が多く、残された資料などが光る成果を上げていたことは、残された資料等から伺い知ることが出来る。その後社会研究部と名称が変わり、地域史とは離れたことを行っていた。しかし、昨今の社会科学系の部活動の低迷や不人気さから、入部する生徒も減少の一途を辿っていた。自分が顧問となった時、部員はゼロに近づいていた。その後部員獲得のために、個別に声をかけていった。そのせいか部員も五、六名になり活動が息を吹き返した。そしてもう一つ原点に戻したことは、もう一度地域史を調査しようということだった。部員は地域史と言ってもほとんどびんと来ていない様子だった。そこでまず大文字の歴史とは違う地域史の説明からスタートした。

その後調査が本格的に始まった。これまでの主な調査は、「小川町と富岡製糸場」「小川和紙」であった。両方とも一年以上の調査期間で、最後は冊子としてまとめた。幸いにも前者は新聞にも取り上げられた。また和紙の調査では、文化祭発表時に小川和紙製の国宝「鳥獣戯画」の模写を発表で

きた。

さて順調にいていた部活動も、三年生が卒業するとまた少数となり、残る部員は二年生一名になってしまった。が、その一名の部員が調査したいと言ったのが、「比企郡の中世城館」であった。正直埼玉の中世城館は玉川工業高校時代に網羅的に調査したことがあり、今更の感があった。しかし、生徒の熱心さに押されて調査が始まった。

## 比企の城館伝説の調査はじまる

さて、前記のように始まった城館調査であるが、実は近年空前と言って良い程のブームが起こっており、専門家はもちろん無数のアマチュア研究者や愛好家が城を訪れている。

しかも比企郡は中世城館の宝庫と言われる程優れた遺構の城館が多いのである。研究書はもちろん、ネット上には個々の城館調査の成果があふれ、これ以上何を付加するのかという問題に直面したのである。屋上屋をかすだけなら調査にそれほど意味はない。そこで生徒と考えたのが、城館に伝わる伝説の調査である。前記したように比企には松山城、杉山城、菅谷城、小倉城等々名城が多いので、必ず周辺の旧家等に城館



社会研究部 城館調査用紙

城館名・調査日	鉢形城 2016年 8月6日 土曜日
場所	大里郡寄居町鉢形
城館の概要 (説明板を参照)	所在地～埼玉県大里郡寄居町鉢形 築城年代～文明8年(1476) 築城者～長尾景春 遺構～土塁・空堀・水堀・石積 現状～鉢形城址公園 史跡指定～国指定史跡  復元工事が行われ二郭、三郭は大変見通しが良く、空堀にいたってはかなり大きく見える者を圧倒する。南側と北側に鉢形城を挟み込むように二本の川が流れていて、なおかつ北側の川は切り立った崖であり、南側の川は深い谷となっている。正に、天然の要害という言葉がふさわしい城である。この地を目指した長尾景春はかなりの知得だったのではないかと長尾氏の頃の鉢形城はそれほど大きくなく、現在の鉢形城の大きさの原型を造ったのは、後に鉢形城に入った北条氏ではないだろうか？
城館の伝説	<竜宮伝説> 築城当時の鉢形城の堀は水が流れていなかった。実は堀に48個もの穴が開いていて、それぞれ蓋がしてあった。鉢型ではその蓋を「釜」と呼んでいた。 その「釜」の上に左衛門という男が、粗末な家を建て美人の妻と二人で暮らしていた。その妻がある日左衛門に告白する。「自分は竜宮城で乙姫さまに仕えている者で、事情があり人間の宮に委ねられた。ところが乙姫様から許しが出て竜宮城に帰ることになった。」妻を逃した左衛門は竜宮城で軟禁を受ける。そして帰る時、土庫に「水切丸」という美しい刀をもらう。鉢形城の堀まで戻って来た左衛門は、「釜」を開けようとするが、固くならず、最後に「水切丸」を使って開けた。 その後左衛門は「水切丸」を保持するためお堂を建て拜んでいた。ところがお堂は火事になり、焼失したが、「水切丸」は残った。感心した左衛門は、鉢形城主北条氏の菩提寺として知られる菩提の正徳寺に、その刀を納めた。「水切丸」の行方はその後分からなくなったということである。

16

では伝わらなかった。部員の彼は、文章は得意だがイラストは苦手であった。困っていたところ、これも生徒のアイデアで漫画研究部に手伝ってもらうことにした。漫画研究部の生徒は喜んで引き受けてくれ、冊子にはレベルの高いイラストが掲載されることとなった。困難にあたった時、考えをめぐらせばきつと打開の道が開けることを生徒も知ったであろう。文章・イラスト・写真等が全て完成し、二年に渡る調査の集大成である研究冊子が出来上がった。タイトルは『聞き書き 比企の城館』とした。

もちろん内容は学術的な研究書とは比べべきもないが、少なくとも血の通った冊子にはなったと思う。何よりもたった一名の部員が本当に喜んでくれた。  
その後この冊子は埼玉新聞に取り上げられ、思いがけない程反響があった。冊子を送付した方からは「生徒とともに行った調査」として評価をいただいた。高校野球やインターハイ、総合文化祭等々で活躍する学校や生徒はもちろん立派であるが、私たちの活動のように地味でもこつこつやっている部活は少ないと思う。もつとその

社会研究部 城館調査用紙

城館名・調査日	菅谷城 2016年 6月25日 土曜日
場所	比企郡嵐山町菅谷
城館の概要 (説明板を参照)	築城年代 鎌倉時代 築城者・城主 畠山重忠 (国指定史跡) 菅谷城は長い筒形城と呼ばれて来たが、その規模や構造を見ては居住に重点を置いた館というのではなく、趣重に防御された「城」と言ってもよいだろう。築城者は鎌倉幕府初期の重要な御家人である畠山重忠とされているが、重忠が居住していた頃は現在の本郭付近のみであったのだろう。本郭よりも二郭、三郭、西の郭の方が大きいのは家や、戦国時代にかけて拡張に次ぐ拡張を重ねた結果ではないか、今のような縄張りを整備したのは一説によれば山内上杉氏といわれるが、明確な証拠はない。 それにしては、土塁どれをとっても規模の大きなもので、現在でも圧巻の姿を留めているのだから、活用されていた時期は見事なものだったのだろう。菅谷城は南側の都幾川を天然の堀とし、北側は崖地帯を利用し泥田堀となっていた。西側、東側は都幾川を利用して自然の堀としている。なお東側には鎌倉街道が走り、畠山氏がここを本拠地としたことが頷けるのである。 現在は北側勝手口のところら嵐山史跡の博物館が建ち、気軽に見学することができる。これだけの城跡が完全に定かたかた残っているのは珍しいと考える。
城館の伝説	菅谷城は建てられた当初は菅谷館と言われていたが、北条方が増築を重ね大きくなったため、城と呼ばれるようになった。戦国当時の菅谷城は辺り一面に小川が流れ、崖地帯となっており現在の菅谷中学校あたりは大きな池があった。城の南側を流れる都幾川は現在よりもずっと広く、船渡も活発であった。また、南側には20m級の堀もあったため南側からは攻めにくいことから菅谷城は北側へ増築を重ね堅固な城となっていた。 1488年、山内上杉氏と扇谷上杉氏が対立した際には、菅谷城北側の狭き道に合戦の舞台となり戦死者も多く出て供養塔も現地に建っている。嵐山町の古地図を見ると、狭き道合戦の場所は、現在とは大きく違い大きな池や堀地帯となっていた。都幾川と堀地帯に挟まれた菅谷城は守りやすく、攻めにくい城であったことがわかるのである。

14

ような活動に光が当たればと切実に思う今日である。  
**部活動って何**  
最近、部活動やその指導方法をめぐって問題が吹き出している。自分にしてみればようやくという感じで、むしろ遅すぎるくらいである。教員になりたての頃、全く素人である運動部を任せられ、本当に四苦八苦した。でも当時はそのことを誰にも言えない雰囲気、ひたすら我慢の毎日だった。

それでも土日もまともに休めない生活は異常と思えなかった。教材研究もする時間が取れないで、何が部活動か……と日々苦悶していた。昨今若い教員がそのことを指摘し、口に出し始めたことは画期的なことである。この人間としてのバランスを崩す状況を何とか改善できればと、自分も何か貢献したいと考えている。

今担当している部活である社会研究部は、週に二回でそれ以上は決してやらない。そして無理もしない。活動は生徒の意向を尊重している。大会やコンクールもないので勝利至上主義となることも有り得ない。

2017年11月2日付け「埼玉新聞」



簡単に言えば緩い部活動であるが、でも部活動は緩いくらいが丁度よいと今では考えている。試合や大会で勝利することや上位入賞果たすことは、それは素晴らしいことと否定はしない。でも思い切つて言えば「たかが部活」である。生徒が前向きでやれないで何で部活なんだろうと思う。私たち顧問は前向きに活動するための補助輪になればよいと考える。しかし、部活動であるから何らかの達成感が必要で、「されど部活」なのである。この「されど」のさじ加減が難しいのである。「されど」に力点が置かれすぎると昨今の問題に辿り着くと思う。

学校でも部活動でも風通しの悪いところには弊害が多く生じると経験からわかる。未来を担う若い教員が肩の力を抜いて、風通しのよい環境で活動できることを強く思う。

### おわりに

話が大きくなってしまったので本題に戻す。

比企の城館伝説調査は冊子の作成をもって終了した。部員も今年度から増えて現在八名で活動をしている。現在の調査テーマは熊谷市江南地区(旧江南町)に戦前建設された小原陸軍飛行場である。熊谷市に

あった陸軍の飛行学校は有名であるが、江南地区にはその予備飛行場である小原飛行場が建設された。しかし、もうその存在は地元でも知らない方が大半である。この飛行場にはまともな記録がないため近い将来本当に忘れられてしまうと調べて調査している。これも記録らしい記録がないため、地元の方の聞き取り調査が中心である。昨年末から調査を始め、現在十人近くの古老に話しを聞いている。中には初めて話すこととして何った方もいて、興味深い聞き取り調査になっている。これも年内には冊子として出すつもりである。戦後七十年以上が過ぎ、先の戦争を語れる方も限られてきている。冒頭で社会科学系の部活の沈滞が目立つと記したが、こうした地味な活動をこつこつと行う部活動が活性化することを願って筆を擱きたい。